



家庭・日本語 (10)

中学生：補習校が続けられない！

在米 8 年。中二の長男には日本の大学に進学して貰いたいと思っています。

現地校の勉強は問題なく良い成績が取れています。

しかし、最近、日本語での勉強が大変で、補習校を辞めたいと言い出しはじめました。



補習校やめても仕方ないが、
日本語での読書を増やし、
現地校の成績を上げること。

補習校を辞めても仕方ありません。しかし、次に述べるような約束をお子さんと交わしてください。

「日本語での読書を増やす」 日本語での知識を獲得する最も効果的な方法は日本語での読書です。日本語での知識、日本人としての常識・文化的な力を伸ばしていきます。

「現地校の成績を上げる」 現地校の学習・成績は、今後のお子さんの学業・進学への鍵です。また、英語での知識・学力が日本語での能力に大きな力を発揮します。

☆

私の回答の根拠を紹介しましょう。

中学生：補習校が続かない！

中学生になって、日本語での勉強が続かなくなって、補習校を退学する。

このケースが、現地校での英語での勉強と並行して日本語での学習を続けてきた子ども（保護者）が、補習校を退学する最も一般的な時期です。どの補習校でも見られる現象で、それぞれの補習校の小学生と中学生の在籍数を比べればはっきりします。

中学生になって日本語での勉強が続けられなくなる理由、また、補習校を退学する理由は、子ども・家庭の事情により様々です。しかし、日米の学校の小学校と中学校の勉強の目的の違いが、その理由の根底になっています。

小学校での学習

小学校段階での学習の大きな目的のひとつは「言語の習得」、具体的には「話す聞く」から「読み書き」の能力の完成です。

低学年の「話し言葉中心の学習」「文字の導入」から、高学年の「読み書き」能力の完成までの学習ステップを通じて、第一言語の習得を目指します。日米どちらの小学校でも、高学年になると読書量が増えて、作文・エッセイで苦勞する子どもが多くなります。

補習校でも、国内の学校と同じカリキュラムで日本語を学

びます。この時期を補習校で学んだこのお子さんは、読み書きも含めた日本語の基礎がほぼ完成していると思われます。

中学・高校での学習

日本（補習校）の中学校以降の学習は、言語としての日本語ではなく、日本語での知識や学力の獲得が目的です。そして、知識・学力の量と質は、学年と共に飛躍的に増大していきます。それは、日本の中学・高校の学習内容を振り返ればはっきりと分かります。

また、現地校の中学・高校での学習も全く同じ状況です。ご相談のお子さんは現在中学 2 年生（現地校 7・8 年）とのことですが、今後、現地校での勉強は学年が上がるに従って学習の質量ともにより厳しくなってきます。習熟度別のクラスが多くなり、生徒の学習レベル・能力に応じた学習が要求されます。

すなわち、現実的には、中学・高校のレベルのすべての学習内容を、日本語と英語で学ぶことは不可能ということです。

大学進学

アメリカの日本人高校生が、日本・アメリカを問わず、大学に進学するためには、現地校での学習・成績が最も大切です。

日本の大学への進学に当たっては、「帰国子女大学入試」を受験します。この特別入試は、海外で学んだ高校生を対象としています。この特別入試を実施する大学は、語学力・海外生活体験・現地高校で得た学力など、国内受験生が持たない、海外の学校で学んだ受験生だけが持つ能力や特性を求めています。日本語だけで授業を行う大学・学部は基礎的な日本語能力を求めますが、補習校の中学校で学んだ基礎があれば十分です。また、最近は、英語のみ、あるいは英語での授業が大半の受入れ大学・学部が多くなりましたので、入学後の日本語力を必要以上に心配することはありません。

アメリカの大学に願・進学の可能性のあるお子さんの場合、現地校での学習・成績が最重要なのは当然です。

松本 輝彦